
ハサミの賢い使い方

摘芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハサミの賢い使い方

【Nコード】

N2365BA

【作者名】

摘芽

【あらすじ】

男のハサミに対する異常な執着を描いた物語。

（前書き）

三題「駅」「ファミレス」「ハサミ」です。

ハサミ この甘美な響き。 一分の無駄もない完璧な造形美を前にすると、俺はその他の全ての思考をストップしてしまう。

ハサミ ああ ハサミ ほんのり丸みを帯びたフォルム。スラッと伸びた綺麗な刃。 外に現れる機能美と、内に秘める狂暴性が奇跡的にマッチング！ なぜこんなにも俺は心惹かれるのだろう。

時に人は社会に溶け込むためにネコの皮を被り、そしてときにライオンの皮を被る。 人間は誰でも何かの皮を被り、その醜悪な身体を覆い隠している。 俺にしても、ポメラニアンとサーベルタイガーを被り分けるくらいのことはしている。

それは人にとって心地いいものだろうか？ 答えは否だ。 人は内面と外面に違いのある人物を、裏がある、腹黒い、などといって忌避するのだ。 俺はそれが許せない。 内面あつてこそその外面、外面あつてこそその内面だろう。

そんな時、俺はこの魅惑的な文房具の存在に気づいたのだ。 外面は美しく、内面にこそ真価が発揮される完璧な個体。 一個として完成されているその姿は、神にさえひとしい。

ああ、できうるならば、俺はハサミになりたい。

ある日、俺はハサミに対する思いが抑えきれなくなり、溜まりに溜まった思いのたけを友人に打ち明けた。

いつも溜まり場になっているファミレス。 クリスマスシーズンが近づき、店内には陽気なクリスマスソングが流れている。 そんな中で俺はハサミの有用性、実用性を、たっぷり1時間（時には実演を交えながら）語りに語った。 紙をハサミで切り抜き、256枚にバラバラにして見せた時は、我ながら爆笑ものだと思ったものだ。

しかし、俺の唯一の友人は、マジきめえ、と一言呟き、俺に目も合わさずに去って行ってしまった。

なぜだ。 俺はさっぱりわからなかった。 ただ、胸の奥に何か熱い

気持ちが渦巻いていた。

胸が痛い。最初、意味も分からず熱くなっていた胸は、いつの間にか鈍い痛みを放ちだしていた。痛い。苦しい。厄介なことにこの痛みは時を選ばずふとした拍子に湧き上がってきた。痛い。苦しい。

そんなときも、俺はハサミに助けを求めた。ハサミで何かを切っている間は、胸の痛みは完全に消え去るのだ。　チヨキチヨキ、チヨキチヨキ、という擬音を聞くだけで俺の脳みそは揺さぶられ、鼓動はどんどん速くなった。

それから俺は、ハサミを肌身離さず持ち歩くようになった。右ポケットがマイハサミの指定席だ。ハサミで切るための紙も常に一緒に持ち歩く。登校中、勉強中、バイト中も無差別に襲ってくる胸の痛みも、即座にハサミを使うことにより解決することができた。友人達は俺のことを敬遠したが、俺にはハサミがある。

気づけば、俺は四六時中ハサミのことを考えていた。紙を切つてみたい。布を切つてみたい。プラスチックを切つてみたい。俺のハサミに対する探求心は、どんどん膨れ上がっていった。ああ、楽しい。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。ハサミ。

ある朝、俺はいつものようにポケットにハサミを入れ、学校へ向かった。駅に着くと、大勢の人でひしめきあっている。どうやら人身事故で電車が遅れているようだ。俺は内心舌打ちをした。今日の1時限目の授業は、単位を落としそうになっていて、できれば欠席や遅刻をしなくなかったからだ。

アナウンスでは、復旧の見込みはまだ立っていないと言っている。このままでは完全に授業には間に合わない。そう考えると、また鈍い胸の痛みが襲ってきた。くそつ。だが大丈夫だ。こんな時は慌てず焦らずまずはハサミだ。

俺は右手でそつとハサミに触れる。ああっ！　いいっ！　胸の痛みがスッと軽くなる。そこで、しわがれ声のアナウンスが聞こえてきた。どうやら電車は40分も遅れるようだ。くそっ。このままでは1時限目どころか2限目にも間に合わないかもしれない。胸が痛い。

俺はハサミを触るだけでは我慢できなくなり、何かを切りたいなと思った。そこで俺は、今朝はハサミで切るために、いつもの厚紙などではなくアルミホイルを持ってきていることに気付いた。未だハサミで切ったことのない素材だ。俺は未知の感触に心を震わせ、ゴクリと生唾を飲み込んだ

しかし、バッグの中を探ってみても、冷たいアルミホイルの感触に行きあたらない。あれ？　ない。ない。どこを探してもアルミホイルが見つからない！　エナメル製のバックの中身は、無情にも教科書と筆箱しか入っていない。なんだ！　なんで！　俺は叫びたい気持ちをグツとこらえ、胸を抑えた。痛い。胸が痛い。そうだ、とりあえずは教科書を切ろう。俺は1時限目で使う英語の教科書を取り出し、表紙をハサミで切っていく。チョキ、チョキ。……駄目だ。何の感慨も生まれない。胸の痛みも治まらない。一度アルミホイルを切れる期待に胸を躍らせてしまったから、今は紙如きを切っても俺の気持ちは収まらない！

胸がどんどん痛くなる。我慢できなくなった俺は、今度は自分のコートを切ってみる。ジョキ、ジョキ。……駄目だ！　ただの布製品なんて、もう何べんも切ってしまっている！　胸が痛い。胸が痛い。視界がかすみ、足元は覚束ない。アルミホイル！　アルミホイル切りたい！　いや、もうアルミホイルで無くてもいい。未だ俺の切ったことのない何か！　何でもいい！　何かないのか！

俺はふらつきながらもしっかりとハサミを握りしめ、必死に未知の素材を探した。そして見つけたのは黒い物体。サラリーマン風の背広の後姿が目に入り、俺は時を忘れて釘付けになった。………

……ああ！　切りたい！　そうだ、俺はまだ人間を切ったことはな

いじゃないか！ 未知の素材。どうして今まで気づかなかったんだろう。この駅にはまだまだ沢山の素材があるじゃないか！ アルミホイルなんて目じゃないぜ！

俺は雄たけびをあげ、目の前の素材に切りかかろうとした。けれど興奮しすぎたのか、ハサミの刃の部分を強く握りしめてしまった。痛っ！ なにこれ痛い！ 痛いよこれ！

俺は一気に熱が冷めていくのを感じた。しかも、場にそぐわぬ奇声を発したせいで、かなり注目を浴びてしまっている。俺は恥ずかしくなり、小さな声ですいません、と謝った。

遅れに遅れた電車がやっと到着した。俺は遅刻してしまった1時限目のこと、切り裂いてしまった英語の教科書のことを考え、ため息をつきながら電車に乗り込もうとしたが、ふと、今まで握りしめていたハサミに気づいた。なんだこれ、ただの文房具じゃん。俺は血の付いた文房具をもう使えないと判断し、その場に捨てて行つた。電車で揺られながら、捨ててしまったハサミの替わりに、今度はカッターを買おう、と思った。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

感想を頂けたらとても嬉しいです！

今後スキルアップを目指して切磋琢磨していききたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2365ba/>

ハサミの賢い使い方

2012年1月5日23時45分発行